

目次

はじめに	3
第1章 現代における人間関係	
1-1 若者の人間関係	4
1-2 いじめの定義の改訂	4
1-3 現代におけるいじめの特徴	4
1-3-1 ネットいじめ	5
1-3-2 学校裏サイト	6
1-3-3 いじめといじりの境界線	7
1-4 やさしい関係	7
1-4-1 やさしい関係の下での生きづらさ	7
1-5 ホットな関係・ウォームな関係	9
1-6 だてマスクをつける若者の心理	10
1-7 携帯電話がもつ意味	10
1-8 つながるためのケータイメール	11
1-9 ソーシャルメディアの出現	12
1-9-1 やさしい関係の下でのマイミク	13
1-9-2 SNS での仲良しごっこ	14
1-10 リセット可能なケータイ空間	14
1-11 まとめ	15
第2章 若者の恋愛像	
2-1 恋愛系ソング	17
2-1-1 西野カナ好きの恋愛系ソング支持層の特徴	17
2-1-2 ケータイ世代における共感	18
2-2 聴き手へのゆだね	19
2-3 恋愛における距離感の変遷	19
2-4 純愛の変化	20
2-4-1 純愛へのあこがれの結果	21
2-5 まとめ	22
第3章 二次元にのめりこむ若者	
3-1 干物女の登場	23
3-2 腐女子の誕生	23

3-3	アニメ音楽の特徴	24
3-3-1	アニソンの特徴	25
3-4	仲間を重んじるアニメ・漫画の世界	26
3-5	まとめ	27
第 4 章	ヴィジュアル系バンドを好む若者	
4-1	ヴィジュアル系とは	28
4-1-1	ヴィジュアル系ファンの若者	28
4-2	ヴィジュアル系バンドの歌詞の特徴	29
4-2-1	ヴィジュアル系バンドの歌詞における若者の特徴	30
4-3	格差社会が生んだ悲劇	30
4-4	将来を悲観する若者	31
4-5	まとめ	32
おわりに		33
謝辞		34
参考文献・参照 HP		34

はじめに

卒業論文のテーマとして今回、若者における人間関係をサブカルチャーをもとにして論じた理由は実に単純で、ただ私自身が小中高生時代ひたすら女子の人間関係における生きづらさにいらしていたからである。しかしこの人間関係の生きづらさはだれしもが抱えるものであろう。とりわけ若者が抱える人間関係の生きづらさを再認識したのが、大学 2 年次のゼミで『友だち地獄』を読んだときである。この本を読んだことで、いじめの定義が改訂されたことや、今日におけるいじめの特徴、バーチャルな環境の中での人間関係など、若者が抱える実にややこしい人間関係を見出すことができた。私自身が人間関係で悩んできたこと、いまだに面倒だなと感じることや「友だち地獄」で見出すことができた若者の人間関係の特徴を踏まえながら、本論文を作成した。

第 1 章では「現代の若者における人間関係」について論じ、上述したようないじめ問題や、ケータイが普及したことによる人間関係の特徴、SNS などのソーシャルメディアなどから人間関係を考察していく。

第 2 章では「恋愛にのめりこむ若者」について論じ、今日の若者における恋愛観を今流行りの恋愛系の曲の歌詞から分析し、90 年代における恋愛系の歌詞と比較しながら今日の若者における恋愛観はどのようにして生まれてきたのかを考察していく。またケータイ小説やドラマを通じて、時代が進むことによって変化した純愛のかたちについても論じていくこととする。

第 3 章では「二次元にのめりこむ若者」について論じ、アニメや漫画といった現実からかけ離れた世界観を好む若者の特徴を考察していく。

第 4 章では「ヴィジュアル系バンドを好む若者」について論じ、ヴィジュアル系バンドの歌詞や風貌などを考察し、ヴィジュアル系バンドに見られる特徴について社会問題から考察し、論じていくこととする。

第1章 現代における人間関係

1-1 若者の人間関係

今日における若者の人間関係は、大人では把握するのが困難なほど、ややこしいものになってきている。若者は相手との良好な関係を保つために、常に極度なまでに気を使いあうやさしい関係が存在している。いじめの定義に関しても、そうした今日における、大人では理解するのが困難な若者のややこしい人間関係が反映されてきているのである。

1-2 いじめの定義の改訂

生徒間のいじめが社会問題の一つとして注目されるようになったのは1980年代半ば頃からである。当初のいじめ問題は、いじめをする側とされる側の個々の性格上の問題として語られ、生徒たちが発する言葉も個々の性格に問題を帰するものが多かった。いじめに対するこのような見方は、当時のいじめの定義にも如実に反映されている。当時のいじめの文部省における定義は、「自分より弱いものに対して一方的に、身体的・心理的な攻撃を継続的に加え、相手が深刻な苦痛を感じているもの」だった。要するに旧来のいじめの定義によると、ドラえもんに登場するジャイアンが、自分より弱い者であるのび太をいじめるシーンがあるように、当時のいじめもこうした加害者と被害者の権威の差によって発生していると思われることが多かったのである。しかしその後、子どもたちの世界にきめ細やかなまなざしが注がれるようになるにつれ、この定義では把握しきれない事例が多く見られるようになっていった。そうしたこともあり、2006年の文部科学省によるいじめの定義は、「当該児童生徒が、一定の人間関係にある者から、心理的・物理的な攻撃を受けたことにより、精神的な苦痛を感じているもの」に改訂された。ではなぜ、このような改訂が行われたのであろうか。そこには現代におけるいじめの特徴が多く浮かび上がってくる。

1-3 現代におけるいじめの特徴

現代のいじめの特徴としてあげられるのは、ある特定の生徒だけがいじめの被害にあうわけではないという、被害者の不特定性である。引っ込み思案がいじめられる一方で、出しゃばりもいじめられる。要するに場の空気を読むことができないいわゆるKYな者がいじめの対象となっていくことが非常によく見られるのである。こうした点からいえば、いじめの主導権を握っているのはその場の「空気」だと思われる。また、いじめの加害者と被害者の関係は固定化されたものではない。今日のいじめの被害者も、明日にはいじめの標的が他の生徒へ移って、今度は加害者の立場へ回っているかもしれないというように、いじめの加害と被害の関係が固定化されたものではなく、時と場合に応じて両者が容易に入れ替わる流動的なものであることも特徴の一つとしてあげられる。いじめの加害者がいじめの被害者であったというのも意外に多く、その逆もまた多く見受けられるのである。このように、今日のいじめは、1990年代以降にいじめが問題視されたときとは異なり、性格上の偏りによって引き起こされるものではない。どこにでも誰にでも起こりうる現象なの

である。だから常にビクビクしながら生活をせざるを得ない。また、いじめの被害者は所属するグループから完全に排除されたりはしない。むしろ、なかば仲間扱いされたままでいじめられる。なぜなら仲間同士の絆を強めるため、一致団結するための手段としてのいじめがそこには存在しているからである。こうした現代におけるいじめの特徴を探ていけば、2006年の文部科学省のいじめの定義の改訂により、「自分より弱いものに対して一方的に心理的・物理的な攻撃を継続的に加え」という文言が外されたのも、現代のいじめの特徴を考察していけば納得できる。

1-3-1 ネットいじめ

最近、急増しているのがインターネットを利用し、掲示板や学校裏サイトに誹謗中傷を書き込むいじめ、通称「ネットいじめ」である。情報化によって携帯電話からの書き込みが簡単にできるようになったことが、このネットいじめが急増した理由であると考えられている。一言に、ネットいじめと言ってもそれにはいくつかの種類がある。

・掲示板やブログ、プロフでのネットいじめ

ア 掲示板やブログ、プロフへの誹謗・中傷の書き込み

インターネット上の掲示板やプロフ、ブログに特定の児童生徒の誹謗。中傷を書き込み、いじめにつながるケース。

イ 掲示板やブログ、プロフに個人情報を無断で掲載

掲示板やブログ、プロフに本人に無断で実名や個人が特定できる表現を用いて電話番号や写真等の個人情報が掲載され、そのために迷惑メールが届くようになったり、個人情報に加えて容姿や性格等を誹謗・中傷する書き込みをされ、学級全体から無視されるなどのいじめにつながったケース。

ウ 特定の児童生徒になりすましてインターネット上で活動

特定の児童生徒になりすまして、無断でプロフなどを作成し、その特定の児童生徒の電話番号やメールアドレスなどの個人情報を掲載した上、「暇だから電話して」などと書き込みをしたことにより、個人情報を掲載された児童生徒に他人から電話がかかってくるなどのケース。

・メールでのネットいじめ

ア メールで特定の児童生徒に対して誹謗。中傷の内容を送信

誹謗・中傷のメールを繰り返し児童生徒に送信するなどしていじめを行ったケースがある。インターネット上から無料で複数のアドレスを取得できるため、いじめられている生徒には誰から送信されているかわからないということになってしまう。

イ 「チェーンメール」で悪口や誹謗・中傷の内容を送信

特定の児童生徒を誹謗・中傷する内容のメールを作成し「複数の人物に対して送信するよう促すメール(チェーンメール)」を、同一学校の複数の生徒に送信することで、当該児童

生徒への誹謗・中傷が学校全体に広まってしまったというケース。携帯電話で撮影した画像を簡単に添付できることから、こうした画像をチェーンメールに添付したといういじめが横行しているという実情もある。いじめの対象となってしまった生徒がトイレで用を足しているところをこっそり撮影し、この画像をチェーンメールに添付する。いじめ側の生徒たちは「これを転送しないとお前たちの画像もアップするぞ」と脅し文句をつけてメールを送る。「自分の画像が広まってしまったら生きていけない」と思いこんだ生徒たちは複数の者に転送してしまう。こうしていじめが全体に広がっていくことになる。

ウ 「なりすましメール」で誹謗・中傷

第三者になりすまして送られてくるメールを「なりすましメール」と呼ぶ。なりすましメールは児童生徒でも簡単に送信することが可能である。学級の多くの児童生徒になりすまして、「死ね、キモイ」などのメールを特定の生徒に何十通も送信したケース。

このように、ネットいじめは誹謗・中傷が目に見える形でネット上に記録されてしまうため、こうしたいじめの被害者が苦しみ続けてしまうという性質をもっている。このネットいじめの温床となっているのが児童や生徒が管理する学校関連のブログや掲示板の「学校裏サイト」の存在である。

1-3-2 学校裏サイト

学校裏サイトとは、ある特定の学校の話題のみを扱う非公式の匿名掲示板である。「学校裏サイト」のもともとはある特定の学校の生徒や卒業生だけが参加できる掲示板を中心としたコミュニティサイトであった。しかし、掲示板に「○年○組の A ってうざくね？」などと個人を特定した書き込みによるトラブルが続出したり、書き込みが原因で不登校になったり自殺者まで出るなど、学校裏サイトにおける問題は深刻さを増した。2007 年 9 月に神戸市須磨区の滝川高校いじめ事件で、学校裏サイトに被害者である男子生徒に対して誹謗・中傷や脅迫紛いの文章を書き込んでいたことがセンセーショナルに取り上げられ、以後いじめ関連の報道の中で頻繁に学校裏サイトが取り上げられ、社会問題になってしまった。また 2007 年～2008 年に放送されたテレビドラマ「3 年 B 組金八先生」の題材の一つとして選ばれたことから一般への知名度が上がった。文部科学省の調査によると、全国の学校裏サイトの件数は 38000 件以上に及んでいた。これは全国の学校数(中学校・高校)の 2 倍の数字である。また抽出調査した約 2000 のサイトのうち約半数の学校裏サイトでは「うざい」「消えろ」などの言葉の暴力があったことも明らかとなっている。しかし 2008 年ごろからは学校裏サイトに対する監視が厳しくなったこともあり、サイトの閉鎖や開店休業状態のものが多くみられるようになり、一時期に比べると学校裏サイトは下火に向かっていくようにも感じられる。

1-3-3 いじめといじりの境界線

最近のバラエティー番組においてお笑い芸人がいじられ、それを観客層が笑うというパターンが固定化されている。お笑い番組が数多く放送されそのなかでも「いじり」が多くウエイトを占めている。このようなお笑いブームのなかで育ってきた若者たちは、いじることの楽しさを少なからず感じてしまうことになる。例えば、学級の中で誰かがいじられているのを見ても、「面白いな」とお笑いの観点から眺めてしまい、いじめといじりの境界線があいまいなものになり、いじられる側の SOS のサインを感じとることに鈍感になってきている。中野富士見中学校のいじめ自殺事件では、「むしろおどけた振る舞いで応じたり、にやにや笑いを浮かべてこれを甘受していた」と被害生徒の態度を加害生徒が語っている。また、福岡県でいじめを苦に自殺した事件では、同級生たちから侮辱的な言葉を浴びせられていたにも関わらず、被害生徒は決して笑顔を絶やすことはなかったことから、加害者側の生徒も「笑っていたからいじめになるとは思わなかった」と弁明している。このように昨今のいじめはいじりとの境界線があいまいなものとなっているため、いじめを見つけるのも、いじめと断定するのも難しい状況となっているという実情がある。

1-4 やさしい関係

いじめの定義が改訂されたように、今日における若者の人間関係は大人では把握が困難なほどややこしいものとなっている。こうした現代の若者の人間関係において特徴としてあげられるのは「やさしさ」である。やさしいという言葉聞いてイメージするのは、困っている人がいたら助けてあげるなど本来ならば他人に対して親切であるといったものであろう。しかし、現代の若者の人間関係における新しい「やさしさ」とは、他人と積極的に関わることで相手を傷つけてしまうかもしれないからこそ、あえて他人と深く関わろうとしないというものである。相手を傷つけるのではなく、相手を怒らせないために深く関わろうとしないというほうがより、若者の営んでいる人間関係にマッチするかもしれない。もしも相手を怒らせてしまったらそこで友情関係は破綻してしまうという恐怖感にさいなまれているからこそ相手の地雷を踏まないように極度に気を遣いあう「やさしさ」が若者の人間関係において蔓延しているのではないだろうか。本論文では、このような若者の人間関係を、精神科医の大平健の言葉を引用し、「やさしい関係」と呼ぶことにする。

1-4-1 やさしい関係の下での生きづらさ

現代の若者たちはやさしい関係の維持を最優先して極めて注意深く人間関係を営んでいる。たとえ自分とは違う考えの者がいても「そうだよね」と相槌を打っておかなければならないという暗黙のルールが存在しているのである。しかし、このような互いの相違点の確認を避ける人間関係は、その場の雰囲気だけが頼りとなる。だからそこには、薄氷を踏むような繊細さで相手の反応を察知しながら、自分の出方を決めていかなければならない緊張感がたえず漂っている。このように今日の若者の人間関係というコミュニティは脆弱

であり何か対立点が表沙汰になってしまうと人間関係が破綻してしまうかもしれないという可能性をもっている。人間関係の破綻とは自分が所属しているグループから仲間外れにされることを意味する。こうした事態を避けるために何としてでも周囲に合わせ相手からの反感を買わないように常に心がけながら人間関係を営むという「生きづらさ」が存在している。また、対立点を表沙汰にしないために異常なまでに気を遣いあうがためにグループの関係の維持にエネルギーを費やしてしまい、外部の人間と関わる気力が残っていない。(土井,2008:17)よって今のグループでうまくいかないと自分はもう最後だと思ってしまい、他の人間関係のあり方と比較して相対化することができないのである。人間関係が破綻しグループから仲間外れにされ、孤立するのは社会から認知されていない、誰からも相手にされていないということを意味する。だから若者は群れる。内心、「面倒だな」と思っても仲間外れにされないためには群れなければならないし、グループの調子に合せなければならない。要するに所属しているグループでいかに対立点を表沙汰にすることなくやさしい関係を維持していくことが若者の人間関係においては非常に重要なのである。こうした人間関係は、女子のグループの間でよく見られる。一般的に男子は誰とでも分け隔てなく仲良くできるというのが世間一般で言われることだが、女子はそうはいかない。女子は常に内戦状態なのである。女子の間では小学校高学年あたりからグループができ始める。女子におけるグループとは、自分の好きなアイドルや趣味が同じなど構成要因は様々であるが、登下校や休み時間、はたまたトイレまでも共に行動する仲間のことである。一般的にそのグループの中ではリーダー格が存在しておりそのリーダーに従いながら生活することが暗黙のルールとなっている。このような女子のグループ内においては前述したようなやさしい関係は当たり前のように見られる。グループ内で、リーダー格から嫌われたり、地雷を踏むような行動や発言をしてしまうとそのグループから外されてしまうという恐怖感が女子の間では常に付きまとうこととなる。こうした事態に陥らないためにグループの間では常に気を遣いあうようなやさしい関係という法則が、こうした生活を生き抜く術としてグループができ始める小学校高学年あたりから身に付き始めるのである。前述したように、グループ内でのやさしい関係の維持に全力を尽くすため他の人間とは関わる気力なんてものは残っていない。だからこそ万が一グループ内で仲間外れにされた場合は他に頼る者がいないため絶望的な状況に陥る。そうした状況に陥らないために日頃からグループ内で対立点を表沙汰にすることなくやさしい関係の下で人間関係を営むことが半ば常識になりつつあるのである。このような人間関係の下で生活している若者にとってみれば本音をぶつけ合う真の友人をつくることは困難であると言わざるを得ない。本音をぶつけ合えば相手の地雷を踏み、やさしい関係の維持が非常に困難になるためである。こうした人間関係が蔓延しているという事情があるからこそチャットなどの顔の見えないインターネット上で友人のほうが本音を話せるということを最近よく聞くが、こうした若者の心理は納得できるものとなる。また、最近の若者たちは、ある動作や言葉に触れると反射的に笑うという傾向がある。これはテレビのバラエティー番組において出演者が発した言葉や動作に対

して、観客たちが大笑いするという場面をよく目にするから、自分たちもそうした場面に出くわしたときはそうせざるを得ないと思い込んでいるという指摘もある。しかし、若者が反射的に笑うという動作に潜んでいる本当の理由は、笑うことで相手との関係を良好に保っておきたいという願いが込められているからではないだろうか。相手が何らかの言葉を発したり、動作をし、それがたとえ面白くないと感じても相手と気まずくならないように必死に笑う。相手と滑らかな関係、いわゆるやさしい関係を保つために笑いまでもが強要されているという実態が現代における人間関係に如実に反映されているという実態がある。

1-5 ホットな関係・ウォームな関係

友情とは、何でも物事を言いあい、時にはぶつかり合いながらもお互い支えあって良好な関係を築いていくものというのが世間一般の共通認識であろう。しかし、現在の若者の間でそうした友情の共通認識の下で人間関係を営むと、もしかしたらKYとみなされてしまう可能性がある。今日における若者の営む人間関係には前述したようにやさしい関係が存在しており、他者を傷つけてしまう可能性があるからこそ何でもものを言いあうような関係はあまり見られなくなってきているかもしれない。ここでは、何でも言い合える関係をホットな関係、現代の若者が営んでいる人間関係をウォームな関係として位置付け、論じていくこととする。ホットな関係とは、相手と積極的に関わることで何でも言い合うことができるような良好な人間関係を築くものである。このホットな関係は現代の若者にはあまり多く見られるものではない。なぜなら、ホットな関係のように相手と積極的に関わるようになると、良かれと思って発した言葉が相手の地雷を踏み、相手との関係がこじれてしまうかもしれないという危機感があるからである。やさしい関係のもとでお互いを傷つけないように極度に気を遣いあうことへの生きづらさを感じながら人間関係を営んでいる若者たちはホットな関係よりも生温い関係であるウォームな関係を好む。ウォームな関係とは相手を傷つけず、お互いの気持ちに深く立ち入らない関係を指す。お互いに傷つけ合うことを避けるウォームな関係への支持は、コミュニケーションによるリスク回避と関連があるように思われる。他者と積極的に関わることで相手を傷つけるかもしれないという危機感のもとで人間関係を営む若者たちには互いの対立点を表沙汰にすることなく、ウォームな関係を維持したほうが、滑らかな人間関係を保つことができるため都合が良いのである。今も昔も滑らかな人間関係を志向してはいるものの、かつての大人のようなお互いの気持ちを察しあっていくホットな関係は、今日の若者には少々暑すぎるのかもしれない。それよりもウォームな関係を若者は好むため大人から見れば生温いと感じるのかもしれないが、かつての暑苦しい関係はもう時代にはそぐわないのかもしれない。今の大人たちが志向してきた関係性と、今日の若者の志向するそれが違うためにそれらの人間関係の中で葛藤が起こってしまっている。

1-6 だてマスクをつける若者の心理

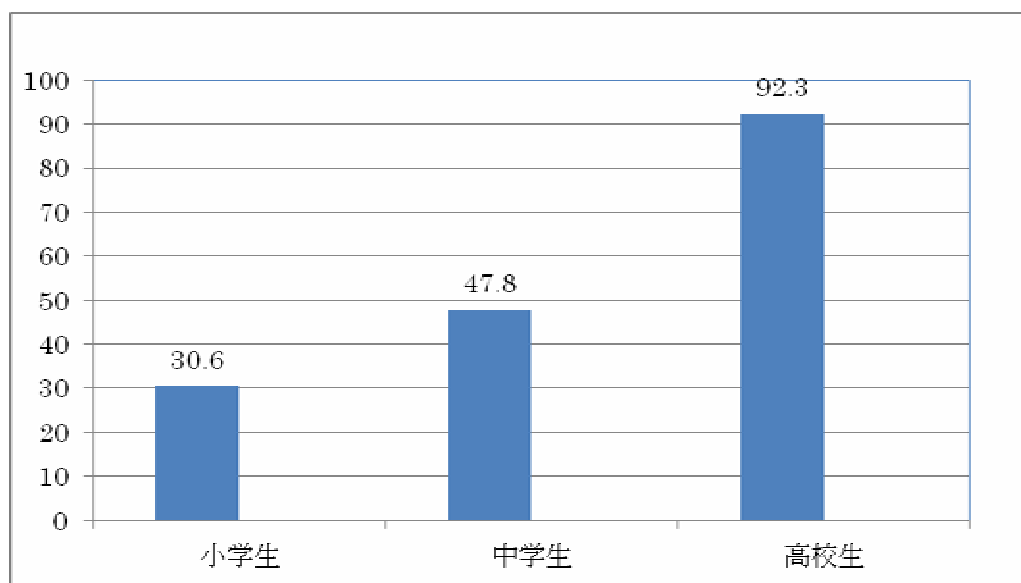
風邪をひいているわけでもないのにマスクをつけるという、通称「だてマスク」が今日若者の間で蔓延している。これは他人と関わりたくない、話したくないということをマスクをつけ顔を覆い隠すことで外界にアピールしているのである。自分の表情を隠すことは「話したくない」「話しかけるな」という意思の表れであり社会と関わることへの拒絶を意味しているのではないだろうか。こうしただてマスクの若者が出現し始めた背景にあるのはやはり若者における人間関係での生きづらさが関係しているように思われる。優しい関係のもとで人間関係を営む若者にとってみれば相手を傷つけないように生活することがある種のルールとなっていることは前述したとおりである。しかしこうした生きづらい人間関係の下では、もはや他人と関わることで自分が面倒になってしまうという末期症状の若者も少なくないはずである。相手と積極的に関わることで傷つけてしまうかもしれないという恐怖感が常につきまとうからこそ、そんな恐怖感もしくは不安な気持ちから逃れる手段としてだてマスクをつけ人と関わらないようにするという強行手段をとる若者が増えたのではないだろうか。人と関わらなければ、傷つけることもないし、自分が傷つけられるということもなくなる。だてマスクをつけることは傷つけない・傷つきたくないというやさしい関係の下で生きる者にとって、最後の手段なのかもしれない。また、後述するが、現代では SNS など様々なコミュニケーションツールが発達し、お互い顔を見合さなくてもコミュニケーションをとることが容易な社会となった。こうしたコミュニケーション空間では文字を通して他人と交流することとなる。直接関わると表情からその時々気分などが相手に伝わってしまうことがあるが、インターネット上では自分の表情は相手に伝わらないで済む。こうしたコミュニケーション空間に慣れてしまった若者は相手に表情が伝わってしまうのを恐れる。万が一つまらない顔をしていては相手を傷つけてしまうと感じてしまうからである。相手と関わりたくないからだてマスクをつける、相手に自分の表情を伝わらないようにするためにだてマスクをつける。だてマスクをつける理由がどちらであろうと、そこには若者が抱えるやさしい関係の下での生きづらさが関係しているのは明らかである。

1-7 携帯電話がもつ意味

2009 年のベネッセ教育研究開発センターの調査によると、携帯電話の所有率について小学生が 30.6%、中学生が 47.8%、高校生が 92.3%となっている。これを学年別にみると、小学生は学年を問わず所有率は 3 割程度である。しかし中学 1 年生になると 40.4%となり中学 2 年生で 49%、中学 3 年生で 55.2%と学年が上がるにつれて所有率が上昇していく。これが高校 1 年生になると 91.3%へ大きく跳ね上がる。このように携帯電話は中学生のうちに浸透していき、高校生になるとほとんどの子どもが持つことになることが分かる。また 2011 年の総務省の情報通信白書によると、40 代の携帯電話の 1 日の利用が約 20 分、50 代が約 11 分であるのに対し、10 代は約 50 分と他の世代と比較して活発であることが明ら

かになった。また 10 代は「いつも友人や知人とつながっているという感覚が好き」と答えた割合が 68.5%で、つながり思考が強いことがわかる。そして、若年層ほど SNS やブログ、Twitter といったソーシャルメディアに関しては隙間時間も利用可能な携帯電話やスマートフォンなどのモバイル端末を主に利用している。以上の調査からもわかるように若い世代ほど一般的な傾向として携帯電話と密接な生活を送っていることが分かる。しかもその利用形態においては音声通話よりもメール機能を多用する傾向が強い。10 代、20 代では他の年代に比べて「人と会って話しているより携帯電話をいじっているほうが楽しい」、「人と会って話すより、メールでやり取りするほうが気楽だ」と感じている。利用頻度のこのような傾向からすると携帯電話は電話そのものの機能から、メールやインターネットなどを用いる情報端末としての位置づけにスライドしつつある。要するに携帯電話はすでに情報通信端末に電話機能が付いているものとして扱われるようになっている。ましてや昨今急速に普及したスマートフォンにおいては電話機能よりもインターネットの機能を重視しているため、今後ますます携帯電話が電話機としてみなされない状態が続くであろう。よって、今や携帯電話はメールを送受信するための装置であり、インターネットに接続してウェブサイト閲覧する装置となっている。したがって、本論文ではこの機器を携帯電話と呼ぶのをやめ、若者たちが一般的に呼ぶようにケータイと呼ぶこととする。

グラフ 1-1 2009 年度携帯電話所有率(%)



出典 ベネッセ教育研究開発センターHP より筆者作成

1-8 つながるためのケータイメール

ケータイは誰かとつながりたいと思った欲求を満たしてくれる都合のよいツールである。ケータイのアドレス帳に登録されている友人から、その時の状況や気分によって友人を選択しメールでつながりあう。今日においてケータイによるメールの交換で期待されている

のは、即レスである。ベネッセ教育研究開発センターの調査によるとケータイ所有者のうち、中学生では約 71.3%、高校生では約 62.3%が「メールが来たらすぐ返事を返す」と回答している。このようにケータイを所有する一定程度の中高生がケータイでつながった友だちなどの相手にはすぐ対応するものという意識を持っている。現在ではメールが来たらすぐに返事をせずにはいられない「即レス症候群」が見受けられるようになっている。これは相手から「無視した」と思われるのを恐れたり、自分からメールを送り返信がこない「私のこと嫌いなんだ」と不安を感じてしまうケータイ世代特有の症状である。だからこそ、メールを受信したらすぐに返信するように気を遣う。食事中もケータイをテーブルに置き、風呂に入る時はビニール袋にケータイを入れて持ち歩き、トイレでもケータイを手放せない。このように即レスが強く求められるのは、メールに載せられるメッセージ内容の交換が第一の目的ではなく、メールを交換することによる「ふれあい」が第一の目的だからである。実際、メールでの内容は「明日の 5 時間目の授業なんだっけ？」のような、自分の時間割を見ればわかるような中身の無い内容だったりする。即レスにおいて重要なのは何を話すのかではなく、どれくらい早くレスが来るかどうかということである。このような実態から、即レスが強要されていることの背景にはメールの内容よりも、どれだけ相手が自分のことを思ってくれているのか、自分が相手のことを思っているのかを伝えるための手段のためであり、即レスによって自分と相手との距離感を測ろうとしているということが見受けられる。また最近では自分でダウンロードしたりケータイに内蔵されている画像を用いてメールをするデコメや、ギャル文字(最近はあまり見かけない)を用いてビジュアル上のインパクトを狙ったメールを利用するケースも多い。これらは単にインパクトを狙っているだけではなく、それだけ相手のために入力的时间をかけたという事実が、それだけ相手のことを大切に思っているという気持ちを伝える手段ともなるのである。こうした手段を駆使しながら若者たちは相手との距離感をケータイによって測ろうとしているという現代における人間関係の構図を見出すことができる。

1-9 ソーシャルメディアの出現

2011 年の総務省の情報通信白書によるとソーシャルメディア利用者の約 6 割が複数を利用していることが明らかになり、ソーシャルネットワーキングサービス(以下 SNS)やブログ、Twitter は半数以上が利用していることが分かった。若年層ほどソーシャルメディアの利用率が高く、複数利用の割合も高い。利用者のうちの約 6 割はソーシャルメディアを複数利用しており、その比率が 10 代では 69.3%、20 代では 61.5%である。ソーシャルメディアの利用によって遠方の友人や知人との絆が深まったり、身近な不安や問題を解決し、人と人が支え合うために活用されているとの報告がなされている。日本最大 SNS である mixi のユーザー数は 2011 年 3 月現在で 2337 万人である。この数字は日本の 6 人に 1 人に相当する。mixi の主な機能として、日記や現在の状況をつぶやくボイス機能、自分と同じ考え、同じ趣味や同じ環境にいる人と集まることができるコミュニティという機能がある。mixi

においては、mixi 上での友人であるマイミクシィ(以下マイミク)が存在する。基本的にマイミクは友人や仕事仲間が多いが、中にはコミュニティで知り合った見ず知らずの人間をマイミクに含めるといったことも可能であり、mixi においては自分が書いた日記や、つぶやいたボイス上での言葉もマイミクに公開しコミュニケーションをとりあうという形がそこには成立している。しかし、昨今では mixi 疲れという症状が見られる。この mixi 疲れとは、mixi におけるつながりを逆に負担と感じてしまい急に mixi での活動を辞めてしまう現象のことである。mixi で日記にコメントをもらったユーザーは、お礼代わりに相手の日記へコメントを残すことが多い。しかし、このやりとりがエスカレートしていくと、コメントを返すことがあたかも義務であるかのように思われユーザーにとって極端な負担となる場合がある。また mixi はマイミクやマイミク以外の他のユーザーのページを訪れると「訪問者」機能によってアクセス履歴が残る仕組みになっている。mixi はこれらの機能によって円滑なコミュニケーションをとることを可能にしているが、逆にこれらの機能によって常に返答が催促されているような状況に陥ることになってしまう。mixi 疲れに陥ると今まで熱心に mixi を更新していたユーザーがいきなり日記を更新しなくなったり、mixi を退会するという状況に追い込まれることになる。mixi 等の SNS の普及でコミュニケーションをとることが容易になった反面で、mixi 疲れのようにコミュニケーションをとることが負担になっていることから、SNS の主目的が反転してしまっているという実情がある。

1-9-1 やさしい関係の下でのマイミク

今日 mixi でよく見かける言葉が「一部の友人まで公開」というものである。これこそが現代の若者の人間関係においての特徴であるやさしい関係を象徴しているものであると考える。基本的に mixi ではマイミク申請が来たら、面識がある人であればマイミク申請を承認し、マイミクとなるのが普通である。しかし mixi で書いた日記をマイミク全員に公開するとなると、公開したくないマイミクや、公開することで一部のマイミクと関係がこじれるかもしれないという不安が生じる。この場合の最も効果的な日記の公開方法が「一部の友人まで公開」というものである。これは日記の執筆者自身が全マイミクの中から公開するマイミク、公開しないマイミクというように振り分けることで公開する相手を決めているものである。マイミク申請が来た場合、面識はあっても内心うとましいと感じている相手の場合、一応承認しマイミクとなるが日記など私生活が知れ渡るようなプライバシーの公開はそうした相手には行わない。では、なぜそうした相手に対してマイミクとして承認するのか。それは、マイミク申請が来たときにそれを却下してしまえばその後その相手との関係がこじれるのを恐れ、そして相手が傷つかないようにとの配慮で一応マイミクとして承認するのである。要するにその後の人間関係で自分が傷つくことや相手が傷つくことを恐れやさしい関係の下でマイミクとなっているのである。コミュニケーションの活性化を図るための SNS であるはずが、友人を選択しながらコミュニケーションを図るというややこしさが存在しているという現状がそこにはある。

1-9-2 SNS での仲良しごっこ

SNS の主目的は人と人とのコミュニケーションにあるのは前述した通りである。最近では SNS におけるつぶやき機能や Twitter において、「今日は A と一緒にカラオケに行きました」「来週は B と買い物に行きます」といった自分の日記帳に記しておけばよい内容をつぶやく者が多い。こうしたつぶやきは他人から見るとかなりどうでもよいつぶやきなのだが、つぶやいた本人からするとかなり意味のあるものらしい。こうしたつぶやきの意味は、自分には遊ぶことができる友達がいますということをアピールと、自分に対して友達と遊んだという充実感や友達がいるという安心感を得たいがためのものと考えられる。このようにつぶやくことによって、「私は友達がいます。仲間外れにはされていません。」ということ暗黙のうちに外界にアピールする。前述したが、今日における若者の人間関係において仲間から外されるとするのは社会から認知されていないということの意味する。また同時に他人から「仲間外れにされている」「友達がいない」と思われることも極度に嫌がるため、こうしたつぶやきをすることで自らを安心させているのではないだろうか。だが、こうした仲良しごっこのなつぶやきを SNS 上にするということが非常に重要な論点であるように思われる。遊んだことを誰かに知らせたいのならメールなどの手段を使って知らせたり、後日他人との会話の中で直接伝えればよいと考えるのが普通である。しかし若者にとって重要なのはこうした仲良しごっこのなつぶやきを SNS 上で不特定多数の者に知らせることに意味がある。たくさんの人に「私には友達がいます。仲間外れにはされていません。」と知らせることが若者にとって、きっとある種の優越感なのであり、安心感に通ずるものではないだろうか。

1-10 リセット可能なケータイ空間

ケータイのバーチャル空間に形成される人間関係は、実際に向かい合ったリアルな人間関係とは異なり、A からの電話は出るが、B からの電話は出ないなどコントロールが割と容易にできる。ケータイによる音声通話ではいわゆる番通選択を利用する若者が多い。この機能を用いることによって、どの呼出には応答し、どの呼出には無視するかを容易に選択することが可能になる。メールの送受信においては、着信したメールに返事を出す場合でも、即レスのようにどの程度の時間をおいてレスを返すかによって、自分の気持ちを暗黙のうちに相手に伝えるという手段が存在している。大切な相手には直ちにレスを返すが、内心うとましく思っている相手には時間をおいてからレスをする、もしくはレスをしないというようにケータイは人間関係のコントロールを行いやすいコミュニケーションツールにもなっている。またケータイのアドレス帳に登録されている連絡先をきれいに整理することで自分がきれいすっきり生まれ変わるような快感を得る若者も多いようなのである。こうしたことは mixi でも見受けられる。mixi においては退会することはクリック一つで実に容易にすることができる。これから先 mixi をしていくことが人間関係を営んでいく上で不都合になる場合や、マイミクとの関係にこじれが生じてしまった場合など理由は様々で

はあるが、mixiを退会しそれまで書いたmixi上での日記など全てのデータをリセットする。そうすることでアドレス帳の整理と同じように新たな自分に生まれ変わったとすら感じる者も少なくないはずである。しかし、退会してしまうとこれまでマイミクと交わしたやり取りやマイミクとの関係を断つことになってしまう。不都合が生じるとすぐに退会することができるが、これは現代における人間関係のつながりの希薄さを象徴してしまっている。このことから推測できるのは、ネット上における人間関係で得られる「つながり」よりも不都合が生じ退会することで得られる「人間関係をリセットする」「新たな自分に出会う」というメリットのほうが大きいということである。リセットが容易にできるネット上の空間はこうした希薄な人間関係を営むことを助長する存在としての機能を有してしまっているという現状がある。

1-11 まとめ

今日における若者の人間関係はかなりややこしいものとなった。ややこしさの主要因として考えられるのは情報機器の発達である。前述したようにケータイの普及率は高校生になると9割を超え、ケータイを持っていないということ自体考えられないような時代になってきている。各ケータイ会社も様々な料金プランを設定したり、防犯ブザー付きのキッズケータイの開発が進み、子どもたちへのケータイの普及を促していることから、ケータイ所有の若年化は今後さらに進行するものと考えられる。こうしたケータイの普及によって常に誰かとつながっていなければ不安というような依存感情が若者の間で広まったのも確かである。2011年にgooリサーチが調査した就寝時における携帯電話利用の調査によれば、布団の中でのケータイの利用状況は「ほぼ毎日」が26.8%と最も高くなっている。性・年代別に見ても男女共通で若年層ほど利用頻度が高く、女性20代においては「ほぼ毎日」が55.7%と最も高くなっていることが明らかとなった。また布団の中で利用するコンテンツにおいてはメールが80%と最も高くなっている。こうした調査から見受けられるのは若者は一日の生活が終わる就寝時においても誰かとケータイを通じてつながっているということである。このようにケータイの利用頻度の高さが若者において顕著に見受けられるにも関わらず、ケータイによって選択的な人間関係が確立してしまったのも確かである。今この瞬間にAと連絡がとりたと思ったらケータイのアドレス帳からAを見つけ電話を発信するなりメールを送信すればよく、容易にコンタクトをとることが可能である。またBからの電話をとりたくないと思えば番通選択を利用してBからの電話を出ないことも可能なのである。ケータイの普及は常に誰かとつながりたいという気持ちが高まる一方で、誰かとつながることは好むが誰かととはつながりたくないといった選択的な人間関係が蔓延したことで若者の人間関係は広く浅いものになってしまったのではないだろうか。そしてソーシャルメディアの出現も若者の人間関係をよりややこしいものへと変化させた。コミュニケーションの活発化を図るためのものであったソーシャルメディアにおいても、mixi疲れやmixi内においての人間関係など抱える問題は様々ではあるがコミュニケーションを活

発化させるどころかコミュニケーションの衰退化を招いてしまうなどソーシャルメディアの主目的が反転してしまう実情がある。こうした人間関係の根底にあるのはやはり若者においてやさしい関係が蔓延していることが関係している。傷つけるのも嫌だし、傷つけられるのも嫌という若者の心理によって相手と深く関わることを恐れることが上述したような人間関係の希薄化を一層深刻化させているのではないだろうか。

第2章 若者の恋愛

第1章で述べたように、若者の人間関係は情報機器の発達に伴い、ややこしさが増していき生きづらいと感じるようなものになっていってしまった。こうしたことは若者たちの友人間における人間関係だけではなく、恋愛の中にも隠されていると思われる。そこで本章では、若者に人気の恋愛系ソングやケータイ小説、ドラマなどを考察し若者における恋愛像を読み解いていくこととする。

表 2-1 2010 年音楽ダウンロードランキング

2-1 恋愛系ソング

以下は音楽ダウンロード・音楽配信サイトのレコチョクにおける 2010 年の着うたフルランキングトップ 5 である。順位は以下のような結果となった

1 位	「会いたくて会いたくて」西野カナ
2 位	「Butterfly」木村カエラ
3 位	「BestFriend」西野カナ
4 位	「if」西野カナ
5 位	「春夏秋冬」ヒルクライム

出典 レコチョク HP

このランキングの特徴としてあげられるのはベスト 5 の中に西野カナとい

うアーティストの楽曲が 3 曲もランクインしているということである。2011 年 2 月には着うた・着うたフルの総ダウンロード数が 2500 万を超え話題となった。いつでもどこでも持ち歩く若者の必需品であるケータイから、西野カナの着うたをダウンロードするということとはいつでもどこでも西野カナの曲を聴いていたいという欲求の表れなのではないだろうか。歌詞検索サイトにおける 2010 年の曲別歌詞検索ランキングにおいても西野カナの楽曲はベスト 10 に 5 曲ランクインしており、下半期には西野カナの歌詞検索が 1 位から 3 位まで独占している。2010 年アーティスト別歌詞検索ランキングにおいても 2 位となっている。歌詞検索サイトにおいて、西野カナの楽曲がこれほどまでに検索されているということは聴き手側は歌詞に注目し、楽曲を聴いているということになる。これほどまでに西野カナの楽曲が若者に支持されている理由は何なのか。西野カナの楽曲の歌詞に注目し、そこに潜んでいる若者から支持される理由を解明していくこととする。

2-1-1 西野カナ好きの恋愛系ソング支持層の特徴

西野カナの歌詞におけるキーワードは「会いたい」である。「君に会いたくなるから」「会いたくて会いたくて」など、曲のタイトルとして「会いたい」が用いられるようにまでなっている。「会いたい」とは、素直な気持ちであるし、こうした素直な表現に共感し曲に聴き入っている若者も少なくないはずである。しかし、この「会いたい」という表現が共感される理由として重要なのは前述したようにケータイの普及であると考えられる。西野カナを支持する年齢層は 15～20 歳だと上記で述べたが、およそその年代にあたる中学生、高校生のケータイの所有率は高い。ケータイの普及に伴い、いつでもどこでも相手と連絡がとれるようになった。いつでも「会いたい」と伝えることがケータイの普及で可能になった。しかしその反面で連絡がとれない場合やメールの返信がこない場合はすぐに不安を感じ

じてしまい、「会いたい」という思いが増す。こうしたケータイ世代の現代の若者の気持ちや思いをストレートに表現している歌手こそが西野カナなのであり、それが若者から支持されているゆえんなのだろう。また、西野カナの歌詞は素直な、飾らない表現を用いていることがわかる。そこには女子中高生がしている日常会話やメールのようないたって普通の、ひねりのない表現が数多く見受けられる。これを聴く若者は、「これって私」と共感するからこそ、その年代にあたる女性からの支持率が高いのではないだろうか。歌詞に難しい表現が出てくると、それに共感することや理解することは困難であるし、感動するという機会は減るかもしれない。しかし西野カナが表現する歌詞のような純粋な気持ちや素直な言葉の羅列によって若者はそれらを言葉の意味を考えるとなくすなりと受け入れることが容易になるはずである。若者にとって等身大の歌詞が支持を集める理由なのだろう。また、西野カナの歌詞が支持される重要な理由の一つとして考えられるのは歌詞そのものにケータイ関連の表現が数多く出てきていることである。ケータイの普及によって連絡がこないことへの不安など若者が感じるケータイに関する悩みも増えた。こうしたことを歌詞に取り入れることで共感する若者も多いはずである。ケータイ世代の若者はこうした表現に「わかるわかる」「あるある」と共感しているはずである。次では、西野カナの曲にどのような形でケータイ関連の言葉が並べられているのかを検証し、若者のどのような人間関係が描写されているのかを読み解いていく。

2-1-2 ケータイ世代における共感

西野カナの楽曲の中で「着信」「メール」「絵文字」といったケータイ関連の言葉や表現がなされているのは 66 曲中 20 曲だった。ケータイ世代の若者にとってこうしたケータイ関連の表現があることで共感し、自分自身をその歌詞に投影することでより一層の共感を覚えるのではないだろうか。WRONG という楽曲の歌詞に「アドレスも全部消した」というフレーズが出てくる。これこそが現代のケータイ世代の若者における特徴なのではないだろうか。肌身離さずケータイを持ち歩く若者にとってケータイは自分の分身のような存在となっている。ケータイが自分の分身だからこそ、キャラクターのストラップを何個も付けたり、ケータイにラインストーンをつけたりするなど、きらびやかにケータイを着飾る「デコ電」が数多く見られるようになっている。これは若者にとってみれば、自らを着飾るためにピアスや化粧をするのと同じような感覚で自分の分身であるケータイに化粧をするという心理が働いているように思われる。WRONG の歌詞にある「アドレス全部消した」というフレーズは、自分の分身であるケータイに登録しているアドレスを消すことや、アドレスをきれいに整理しなおすことで自分も生まれ変われるような感覚を得ることができるといふ若者の心理や、前述したようなケータイにおいてのリセット可能な人間関係を色濃く示しているようにも感じられる。また次で詳しく述べるが今日における若者はケータイによって孤独を感じる場面が多くなったように思われる。ケータイ世代の特徴を示す歌詞であるからこそ、「どうして私の気持ちがわかるの?」といった具合にその年代にあた

る若者の共感を得て女子中高生のカリスマと呼ばれるのではないだろうか。

2-2 聴き手へのゆだね

歌詞を分析するにあたり、2010 年歌詞検索ランキングトップ 10 の楽曲に注目し分析を試みた。その結果、2 曲を除くすべての曲に聴き手へのゆだねと見受けられる表現が登場していることがわかった。前述したように西野カナの楽曲は素直で飾らない表現やケータイ関連の表現が数多く登場することが若者から人気を集める理由なのではないかと論じた。しかし今回注目した西野カナ以外の歌手の曲においても素直で飾らない、いわゆる日記的な表現やクエスチョンマークが多用される歌詞、クエスチョンマークまで付かなくとも聴き手へ問いかけ、答えや解釈をゆだねる表現が数多く登場するのである。こうした聴き手へのゆだねは何を目的にされるものなのか。今日の若者は孤独を感じる機会が増えたように感じる。その理由として考えられるのは情報化の発達に伴うケータイの普及や SNS の出現である。ケータイで誰とでも連絡をとることが可能になったのに対して連絡がつかない場合や誰からも連絡がこない場合は不安な気持ちになり、孤独を感じてしまう。また SNS においては自分の近況を伝えたり、身近な人物の近況を知ることが容易にできるようになった。しかしその反面で自分より他の者が楽しそうな生活を送っていることを知るとやはり孤独を感じるようになってしまう。こうしてケータイ世代の若者にとって孤独は身近なもので、いつでもどこでも感じてしまう存在として位置付けられてしまっているのである。こうした状況だからこそ、孤独な自分の救い手となる存在として聴き手へゆだねる歌詞が多く支持を集めているのかもしれない。自分自身に問いを投げかけてくれる歌詞が、自分は忘れられていないという気持ちを引き起こさせるからこそ、こうした楽曲が人気を集めるのではないだろうか。

2-3 恋愛における距離感の変遷

今日における恋愛系ソングの代表格は西野カナであることは前述した通りである。西野カナ以外にも青山テルマや加藤ミリヤなども恋愛系の曲を好む若者からは支持される。現在、若者に人気を誇る恋愛系の歌詞はケータイが普及したことによる不安な感情を表現したものが多く。こうした歌詞は以前から見られるものではない。1990 年代における CD がミリオンセラーとなった曲のほとんどは恋愛系のものであるが、歌詞を分析してみると現代の恋愛系の歌詞とは違うことがわかる。1990 年代に売れた曲は今の恋愛系の曲より、はるかに「重い」と感じられるような表現が用いられているように感じる。ケータイが普及した今日では不安を感じさせるような歌詞のほうが若者にとっては共感を得られやすい。ではなぜ 1990 年代において「重い」と感じてしまうような歌詞が共感されたのだろうか。こうした「重い」歌詞の背景にあるのは若者の恋愛における距離感が関係しているのではないか。ケータイやパソコンの情報機器が未発達であった当時は恋人たちが連絡をとる手段は手紙か電話くらいであろう。今のように頻繁に連絡をとることが不可能であった時代

ではお互いの気持ちを伝えあうことすらできなかったのかもしれない。相手に対して伝えたい気持ちが積りにつもった結果、前述した「重い」歌詞に共感されたのではないかと推測される。1980年代から1990年代に放映されたJR東海のコマーシャルであるシンデレラエクスプレスには、こうした当時の恋愛事情が色濃く反映されている。このコマーシャルは松任谷由美が1985年にリリースしたアルバム「DA・DI・DA」の収録曲の一つである「シンデレラエクスプレス」をモチーフとし、東京発新大阪行き最終列車「ひかり289号」の出発時刻である21時ちょうどを童話のシンデレラで主人公が舞踏会へ行くための魔法の解ける午前0時に見立て、離れ離れに暮らす恋人たちが週末に出会い、再び別れていく日曜日の夜の新幹線ホームで繰り広げられる恋のドラマを描いたものであった。情報機器が発達した今日ではシンデレラエクスプレスに見られるような光景はあまり見られない。たとえば離れていてもメールだって簡単にできるし、Skypeを使えば離れていても顔を見ながら会話することだって可能なのである。だから現代ではシンデレラエクスプレスのように別れを惜しむ恋人達はよほどの依存関係にない限りあまり見られないと思われる。このように恋愛における昔と今の距離感の違いによって恋愛系の歌詞の特徴を時代ごとに見出すことができるのである。

2-4 純愛の変化

現代における若者の恋愛像を論じる上で重要なキーワードをもつのが「純愛」である。昔から純愛ものの作品は数多く見受けられていたが、今日における若者が理想とする純愛のかたちが時代の流れと共に変化していることに気付く。以前の純愛物語の多くは、二人の間を阻む社会的な障壁を打ち砕こうと努力する中なかで、あるいはその障害からの逃避行を延々と続けるなかで、互いを思う気持ちは高められていくという構図をとり、どちらの場合も社会という障壁との葛藤が純愛を成立させるための必須条件だった。また、その後の純愛のかたちについては当時大ヒットしたテレビドラマ、「高校教師」や「失楽園」で見出すことができる。このドラマでは、教師と生徒の恋愛や不倫など社会的にタブーとされることがテーマとして扱われている。許されない愛を貫く手段として登場人物たちは最終的に「自殺」というかたちで純愛として形づけるのであった。こうした点からすれば、純愛を貫くかたちとして死が美德として扱われていたように思われる。しかし現在における若者が理想とする純愛のかたちはやはりそうした過去のものとは違うのである。現代における純愛を語る上で重要なものはケータイ小説である。ケータイ小説とは小説家でもない一般の書き手が小説を執筆しそれをケータイのウェブサイトを通じて公開するというものである。こうしたケータイ小説において爆発的なヒットとなった「DeepLove」や「恋空」といったものは恋愛ものであり、そして主人公が波乱万丈な人生を歩みながら生きていくというパターンが固定化されつつある。そしてケータイ小説において重要なのは死や病など生物学的な障壁が立ちはだかるということである。シリーズ4作で270万部のヒットとなった「DeepLove」の主人公はエイズを発症して亡くなり、映画化にもなり話題にな

った「恋空」の主人公の恋人もがんに侵されて亡くなってしまう。このようにケータイ小説は、死や病など絶対的な障壁に対抗することによってお互い励ましあいながら気持ちを高め、純粋さを高次元へと押し上げていく。以前の純愛物語のような社会的な障壁や、社会的にタブーとされる恋愛を貫き自殺するというものではなく、二人の間に立ちはだかる死や病といった絶対的な敵へ対抗すること、こうした苦しい状況の中でお互いの愛を確かめ合い、深めあうことが感動を呼び、それこそが現代における純愛として位置付けられているのである。社会学者の土井隆義によれば、「現代の若者たちにとっての純粋さとは、社会の不純さと向きあうことで対抗的に研ぎ澄まされていくような相対的なものではなく、むしろ身体のように生まれながらに与えられた絶対的なものである」(土井,2008:110)。だからこそ、ケータイ小説において死や病が積極的に用いられているように思われる。そして、実生活における人間関係がややこしいものになっているからこそ、死や病など絶対的な敵に対抗しながら愛を育むという二人の世界をひたむきに生きる純粋な物語にあこがれをもつ若者が多いと推測されるし、直接話すよりもメールでの会話のほうが心を開くことができる若者が多いようにリアルな社会における人間関係において真の友情関係が成立しづらいという現状もある。こうした現実を生きる若者にとってみれば共に支えあいながら苦難に立ち向かうケータイ小説の登場人物にあこがれをもつのではないだろうか。また若者がケータイ小説に惹かれる理由として考えられるのは、ケータイ小説自体がノンフィクションであるものが多いということである。ケータイ小説の作者は10代の若者が多く含まれており、作品として洗練されていないものが多いことからケータイ小説の多くは手記の色彩を強く帯びている。若者は同世代の手記を読むような感覚でケータイ小説に接しているのである。こうして純愛を強く感じさせてくれるケータイ小説に描かれている身近な空間こそが若者の純愛へのあこがれをより強くさせるものと思われる。

2-4-1 純愛へのあこがれの結果

2010年に国立社会保障・人口問題研究所が調査した結婚と出産に関する全国調査によると、未婚者で交際相手をもたない者の割合が男女ともに2005年の前回調査を上回っていることがわかった。男性では61.4%で前回より9.2%増加し、女性では49.5%で前回より4.8%増加した。その中でも若者の年齢にあたる18～24歳の男女において、異性との交際を望んでいないと回答した者が男女ともに約6割いたことも明らかになっている。また、恋愛できない若者の主人公のドラマが放映されるなど今日において、恋愛をしない若者が増えていることは事実である。こうして恋愛から遠ざかる一方の若者が多いのに、恋愛系の歌詞に支持が集まる。これは一見するとかなり矛盾に満ちているようにも思われる。しかし、これこそが現代における純愛へあこがれの結果なのではないだろうか。今日において、恋愛系の楽曲はとても人気がある。上記で示したように年間ダウンロードランキングを見てもほぼすべてが恋愛系なのである。その中でも歌詞は、充実に満ち溢れている系や切ない系など様々ではあるがこうした曲を聴き、共感するからこそ人気が集まる。若者はこうし

た恋愛系の曲に陶醉し、より一層恋愛へのあこがれを抱くようになる。しかし、実生活で恋愛をしようとなるとうまくはいかない。なぜなら、世の中にあふれる恋愛系の曲を聴きまくり、これこそが自分のあこがれの恋愛という固定観念が仕上がってしまうからこそ、実生活で恋愛をしようと思っても曲で描いたあこがれの恋愛が先行してしまい、その結果うまくいかず恋愛から遠ざかるからである。これは前述したケータイ小説についても同様である。こうして若者は恋愛系の歌詞やケータイ小説の物語に自己をあてはめ、共感し、あこがれを抱く。自己のこうでありたいという恋愛イメージを完成させるのだが実生活ではそううまくはいかず、そこからやはりまた曲を聴き、ケータイ小説を読み、あこがれを膨らませていく。こうした無限ループがあるからこそ恋愛ができないでいる若者が多いのではないだろうか。恋愛への強いあこがれを抱き続けるという純粋な気持ちが恋愛離れを加速させるという矛盾が起きているという現状がある。

2-5 まとめ

前述したように、今日におけるヒット曲、とりわけケータイ世代である若者が積極的に利用するケータイの着うたや着うたフルのダウンロード数が多いのはやはり恋愛系の曲である。恋愛系の曲の中にはケータイ関連の歌詞が多く見受けられるというのも前述した通りである。ケータイ関連の歌詞については西野カナの歌詞についてのみしか論じていないが、西野カナ以外の人気の恋愛系の曲にはやはり多くのケータイ関連の歌詞が多いことにも気付く。ケータイの普及に伴う恋愛においてのさみしさや不安な気持ちをくみ取った歌詞が多いことは現代における恋愛系の曲に共通していることなのだろう。こうした恋愛系の曲やケータイ小説を読む若者はやはりあこがれの恋愛像を描く。あこがれを持ち続けることで、その輝きは増幅することとなる。あこがれを持ち続けるがゆえに、恋愛をしようと試みてもあこがれが先行してしまい恋愛から遠ざかってしまう若者が多いことも事実なのである。今日において晩婚化が叫ばれ、その理由としてあげられるのが女性の社会進出であるとされる。このように晩婚化の原因を女性の社会進出と押し付けるのはよろしくないのではないだろうか。男女ともにあこがれの恋愛が先行するということも晩婚化の理由であるように思う。恋愛系の曲やケータイ小説に見られる純愛物語に没頭して、その中における恋愛観にとらわれすぎず、自分らしく恋愛をしたほうが自分にとっても社会にとっても好都合な気がする。また、本章では恋愛系の歌詞における共感の変遷や、純愛の変遷についても論じた。これから先、今現在よりももっと社会にモノがあふれ、便利になっていくことは明らかである。社会の変化に伴って人々の価値観が変化するのも今までの自分の人生を振り返って見た限りでは明らかである。このような利便性の追求や価値観の変化に伴って恋愛事情も変化していく。今、当たり前だと思っていることが将来、当たり前でなくなるかもしれない。そのような変化を追い求めながら、なぜ変化していくのかを考察していくことで若者における恋愛事情を読み解くことができるのかもしれない。

第3章 二次元にのめりこむ若者

現代の若者は前章で述べたように恋愛に興味を持ち、そうした曲を聴いたり、ケータイ小説を読んだりする者が存在する。恋愛に流れる若者が多い一方で、恋愛に興味がない、恋愛ができないといった若者たちはどんなことに楽しさを見出しているのかという疑問が生じる。楽しさの見出し方は人それぞれであると思うが、楽しさの一つとして今日考えられるのが、アニメや漫画などオタクとして扱われる分類への好意である。本章では二次元、すなわちアニメや漫画を好む若者の特徴について考察していくこととする。

3-1 干物女の誕生

前章で、今日における音楽シーンで最も人気があるのは恋愛系ソングであるが、こうした恋愛系ソングやケータイ小説で自分の理想の恋愛像を描くものの、現実世界でそうした理想に追いつかないということも述べた。しかし、世の中全てが恋愛にあこがれを持つ若者であふれているわけではない。昨今注目を集める干物女がその典型である。干物女とは、恋愛を放棄している、様々なことを面倒くさがる女性のことを指し、人気タレントを起用してドラマ化もされるなど一躍世間に知れ渡るようになったとともに、自らを干物女だと自負している女性も目立つようになった。この言葉は勝ち組や負け組など極端に分ける風潮、すなわち格差社会が反映された言葉の一つであると解されている。格差社会が目立つようになった1990年代後半以降の現在では、多額の資産や巨大な名声を手に入れた実業家や投資家などの富裕層を人生の勝者と見なし、勝ち組という言葉が頻繁に使われるようになった。しかしそれとは反対に、低賃金であったり、社会的地位が低かったり、出世コースから外れた労働者らを人生の敗者と見なし、負け組と呼ぶようになった。こうした金銭的に区別する言葉が誕生し始めたことでそれ以外にも勝ち組や負け組と分別する風潮が生まれたように感じられる。その典型が恋愛についての分別である。その草分け的存在なのが、酒井順子が2003年に出版したエッセイ集「負け犬の遠吠え」である。30歳代を超え、子どもを持たない未婚女性を指して負け犬と表現した。日本では、結婚・子育てこそが女の幸せとする価値観が強い一方で結婚より仕事、家庭よりもやりがい求めて職業を全うする女性が増加傾向にある。その結果、気がついた時には職場では相応の地位を獲得しつつも、30代で浮いた話が一つもないというジレンマに陥ることもあるというのである。こうした女性の伝統的なライフスタイルの変化によって、結婚に興味なし、しかもそれ以前に恋愛に興味なしという干物女が出現し始めたのではないかと推測される。恋愛に興味がないから、もちろん異性なんてものは全く眼中にない。だからこそ、異性の関心を引くような行動は一切起こさない。恋愛に熱くなる若者がいる一方でこのように恋愛に興味がないという女性がいることも確かである。

3-2 腐女子の誕生

女性のライフスタイルの変化によって干物女が誕生したのは前述した通りである。しか

し女性の変化は干物女だけにとどまらない。2000 年頃から巨大掲示板「2ちゃんねる」を中心に「腐女子」という表現が現れ始めるようになった。この腐女子とは、男性同士の恋愛を扱った小説や漫画（以下 BL とする）を好む女性のことを指す。もともとホモセクシャルな要素を含まない作品の男性キャラクターを同性愛的視点でとらえてしまう自らの思考を自嘲的に「腐っているから」と称したことからこの言葉が誕生したとされている。インターネット上では、会員制の「腐女子応援ポータルサイト」というのも存在しており、こうしたサイトが存在するからには、腐女子が世間に一般化しつつあり、腐女子人口が増えていることがうかがえる。このような腐女子の間ではそのコミュニティでしか通用しないような言わば腐女子用語のようなものが多数存在する。腐女子が好むような漫画に興味がない者からすると、そうした用語の意味は確実にわからないし、たとえわかったとしても気味が悪いと敬遠されるかもしれない。このような世間の腐女子に対するイメージがあるからか、腐女子とされる女性は自らが腐女子であることを外部に隠す傾向があるという。この、腐女子が自らが腐女子であることを外部に隠す傾向があるということに注目する。実生活で自分のこうした趣味があることを隠し続けるのは、やはり周りから蔑視的な目で見られるという不安が根底にあるのではないか。こうした不安な気持ちを取り除いてくれるのが一人での自由な時間、すなわち BL 作品を視聴する時間なのではないだろうか。一人でいる時間を好むほど、外部との関わりもなくなっていく。このようにコミュニティが狭くなることによって現実世界における人間関係も希薄になりがちになる。第 1 章でも述べた人間関係の希薄さはこうした側面からも考察することができるのである。

3-1 アニメ音楽の流行

昨今の音楽シーンで特徴的に見られるのはアニメや漫画から派生したキャラクターが唄う楽曲がよく売れているということである。楽曲だけにとどまらず、漫画やアニメのキャラクターグッズは大人気である。こうしたアニメや漫画は、以前ならばオタクのものとみなされ敬遠されがちだった。1980 年代後半におけるバブル期の華やかなブームに乗ることができなかった者は、こうした華やかさに馴染みきれない現実から逃れるために宗教や自分の好きなアニメや漫画にのめりこんでいくという構図があった。当時のオタクは自分の趣味である二次元のアニメや漫画にはまり込んでいくため、華やかなブームに乗る者からは「気持ち悪い」と思われることが多かった。華やかなブームに乗る者は男女交友など、性にまなざしを向けるようになったため、こうした者からすると実世界に目を向けず、二次元の世界にはまり込んでいくオタクへの印象は悪かったはずである。また、当時の日本はアニメや漫画、美少女など普通とみなされない趣味をもつ人々に関して蔑視的な感情があった。「オタクは暗い」「社交性がない」という主観的なステレオタイプの印象もあり、オタクの肩身は狭いものになっていった。ましてや 88 年から 89 年にかけて起きた連続幼女誘拐殺人事件の犯人がビデオテープや漫画、雑誌を多数所有していたことをマスコミがセンセーショナルに取り上げたことから、多くの人々は報道を通じて「オタク = 変質者・

犯罪予備軍」といった認識が普及するようになった。しかし 90 年代における家庭用テレビゲームの普及やパソコンの普及に伴い、ゲームオタクが一般化し始め、2005 年に放映されたテレビドラマ「電車男」が流行ったことで世間のオタクへのイメージが徐々に変化していく。「萌え」という言葉が一般的に普及し、「萌え」はオタク文化の主要な要素とみなされるようになり、2005 年のユーキャン新語・流行語大賞においてトップテン入りを果たし一躍注目を集めた。また「電車男」において多数登場した顔文字は若者の間で流行し、雑誌等でも顔文字の特集が組まれることも多々あった。こうして 2000 年代に突入するとオタク文化は広く一般に知れ渡るようになるとともに昨今ではクールジャパンが唱えられ、オタクはその主要な要素として重要視される存在となった。このように世間にオタク文化が浸透したことで、アニメソングがヒットするようになり 2010 年 4 月 26 日から 5 月 2 日の間のオリコンウィークリーランキングにおいてテレビアニメ「けいおん！」に登場するキャラクターが唄う楽曲 2 曲が 1 位と 2 位を獲得し、アニメキャラクターによりシングルが首位を獲得するという史上初の偉業を成し遂げることとなった。また 2011 年における女子中高生ケータイ流行語大賞の 2 位にはある声優の持ちネタである「てへぺろ」がランクインしており、今日のアニメブームは若者を中心に索引している印象がある。

3-1-1 アニソンの特徴

人気を集めるアニメソング、通称アニソンにはどのような特徴を見出すことができるのか。このことについて検証するため、放課後ティータイムや水樹奈々といった今日において人気のアニソンアーティストが唄うアニソンの歌詞を分析した。これらアニソンを分析した結果、見えてきたものはアニソン独特の世界観あふれる歌詞が多いということである。アニメを知らなければわからない語句やメルヘンチックなものまで様々ではあるが、こういった歌詞はアニメを知らない者が聴いてもよくわからないという印象を持つかもしれない。しかし、この独特の世界観こそが人気を集める大きな理由なのではないだろうか。こうしたわかる人だけがわかるというアニソンの特徴こそが、アニメ好きの若者の結束を強めることにつながっているように思われる。昨今ではアニメや漫画好きの者が集まるイベントも数多く開催され、中でも 2010 年の東京国際アニメフェアにおける来場者数は 13 万 2492 人となっており、年々来場者数が増加している傾向がある。こうしたたくさんの仲間たちが集うアニメイベントにおいて、わかる人だけがわかるという独特の世界観を仲間たちと共有し、アニメ好きの結束を強めているのではないだろうか。このような仲間たちの結束から、アニメ好きや漫画好きの通称オタクが東京の秋葉原に集うという現象も理解することができる。アニメや漫画が好きなオタク達にとってみれば、結束を強めることができる仲間たちは非常に大切な存在として位置付けることができる。仲間たちと共にアニメや漫画の話で盛り上がり連帯感を強めていく。それはこうしたことに興味がない者からすると異様に思われがちで敬遠されがちではあるが、彼らにとっては非常に重要なやりとりなのである。このように仲間を重んじるからこそなのか、アニソンには友情系のものが数

多く見受けられる。1章で述べたように現代社会は人間関係が希薄化し相互で感情をやり取りするといったことはあまり見られない。しかしオタクは、独特の世界観を共有し仲間との結束を強めていく。こうしたオタクの人間関係の構図を、希薄な人間関係になりつつある現代社会は見習うべきところがたくさんあるように思う。

3-2 仲間を重んじるアニメ・漫画の世界

今日最も売れている漫画で誰もが思い浮かべるのは「ONE PIECE」だろう。『少年ジャンプ』に連載され2011年11月現在で単行本は64巻まで刊行されている。累計発行部数は64巻現在で2億5000万部を突破しており、日本国外では翻訳版が30ヶ国以上で販売されている。物語は夢への冒険や仲間たちの友情といったテーマを前面に掲げ、深く練りこまれた壮大な世界観が人気を呼んでいる。オリコンが実施した「今までで1番感動した漫画は？」というアンケートにおいても男性部門1位、女性部門1位、総合1位になっており、泣ける漫画として評されている。また同じく『少年ジャンプ』で連載されている人気漫画の一つが「NARUTO」である。単行本は2011年11月現在で58巻まで発刊されている。物語は落ちこぼれ忍者のうずまきナルトが里一番の忍である火影を目指し、数々の試練を乗り越え、成長していくという筋立てとなっている。仲間との友情や裏切りと復讐、師弟の絆が中心として描かれている。こうした今日大人気の漫画に描かれている共通項目は「仲間との友情」である。このような漫画を求める理由として考えられるのは、こうした漫画の世界に自分のこうでありたいという姿を見出すからであろう。第1章で述べたように現代の若者における人間関係は希薄化し、やさしい関係のもとでかなり生きづらい人間関係を営んでいる。若者が仲間と共に何かを成し遂げるとするのは学校生活で見られる体育祭や学校祭といったものであり、皆で一体感を味わおうと熱く燃え上がり、こうした行事ではノリを大切にする。このような光景は人間関係をやさしい関係のもとで意図的に希薄な状態に保とうとしている若者の日常とは正反対の現象のようですらある。ノリを大切にする学校行事で一人だけつまらなそうな顔をしているのは周囲からKYとみなされる。だから楽しくないと感じる者でもKYにならないために懸命に作り笑顔で周囲の雰囲気に合わせて。「こうした点から言えば、学校行事を一緒に成し遂げた結果として自然に一体感が生まれてくるというよりも、むしろ一体感を味わうことそれ自体が自己目的化しているように見受けられるのである」(土井,2008:48)。しかし、漫画の世界に目を転じてみると、実社会で常識となりつつあるやさしい関係なんてものは存在しないし、大切な仲間と共に何らかの目標に向かってどんなことにも立ち向かっていくというものが固定化されつつある。仲間と一体感を得るために作り笑顔でふるまうやさしい関係のもとでの人間関係とは程遠いこうした世界にあこがれを持つのであろう。自分にとってあこがれの世界や、現実のややこしい、生きづらい人間関係から一時だけ逃れる手段としてこうした仲間を重んじる漫画が大多数に読まれているのではないかと推測される。

4 まとめ

オタクに対するイメージが以前と比べて比較的良くなってきているものの、依然としてオタクに対して異様な目で見える者がいることも事実である。自分の好きなことに没頭することは悪いことではない。蔑視的な視線を気にすることなく、オタク達にはありのままの自分を大切に、そしてそうした趣味を共有することができる人間関係を大切にしていってほしいと思う。また人気のアニソンや、漫画において今日における理想の人間関係が描かれていることは前述した通りであるが、こうした事実があることはやはり当然の結果であろう。人間は誰しもが理想を抱く。それは現実世界に満足していないからであったり、今のままで満足しているけれど、こうしたほうがもっと良くなるのといった具合にである。今日における若者の人間関係はケータイでしかつながりを感じることができないような希薄な関係に満ちている。だから、理想の人間関係の構図を描く漫画の需要が高まるのであろう。これは第 2 章の恋愛系の歌詞に求めるのは理想の恋愛であるということと同じことである。理想の人間関係が描かれている漫画を多数の人が読むのなら、そうした人間関係に近づくための努力をすることによって今日の生きづらい人間関係を改善できると思われる。ただ単に楽しむための漫画、漫画 = 娯楽という概念は今日において通用しなくなっているのではないか。自分の理想の人間関係を描く、言わば教科書的な位置づけとして漫画が存在しているような気がする。

第4章 ヴィジュアル系を好む若者

日本の音楽シーンにおいて異色な魅力を放ち続けるのが、ヴィジュアル系バンドである。後述するが、ヴィジュアル系バンドはメイクや服装などが普通とは程遠いようなインパクトのある仕様になっている。日本の音楽シーンにおいてこうした特殊な雰囲気を持つヴィジュアル系バンドがここ最近台頭してきているように思われる。その表れともいえるのがヴィジュアル系バンドを真似たコスプレをする若者が多いことである。ヴィジュアル系バンドを好む若者や、ヴィジュアル系バンドを真似たコスプレが流行る背景にはどのような若者の姿が反映されているのかを考察していくこととする。

4-1 ヴィジュアル系とは

今日においてヴィジュアル系バンドを好む若者も少なくない。そもそもヴィジュアル系とは日本のロックシーンに1990年前後から現れ始めた視覚的にインパクトの強いバンドの総称である。髪を立てる、派手なコスチュームをまとう、化粧を濃く塗るなど、視覚的なインパクトを与えている。ヴィジュアル系バンドの歴史を概観してみると90年代を通じ、「X JAPAN」や「LUNA SEA」など、世間に知られるようになったのだが、その後2000年頃を境にメディアで取り扱われることも少なくなり、もはや下火になってしまったかのように思われてきた。しかし、実際にはフォロワー達が年々着実に生まれており、ヴィジュアル系バンド・シーンを陰ながら支えていたのである。事実、現在活動している若者に人気のあるヴィジュアル系バンドの多くは90年代の「X JAPAN」や「LUNA SEA」といった先陣のヴィジュアル系バンドに影響を受けてバンドを始めた世代であるように思われる。こうしたヴィジュアル系バンドを好む若者は、前述したような恋愛系やアニソン系を好む若者とどのような違いがあるのだろうか。ヴィジュアル系バンドを好む若者の特徴を見出していくこととする。

4-1-1 ヴィジュアル系ファンの若者

ヴィジュアル系バンドの歌詞は「墮落、害、憂鬱、死、罪」など暗い言葉が並べられていることが多い。例えばムックというバンドは「遺書」という曲で、「もし僕が眠っても 教室の机に花は 置かないでください 悲しさの演出はいらないから この世界が 僕らを創り出して この世界に 僕らは殺された」と唄う。ヴィジュアル系バンドのファンである若者はこうした歌詞に陶醉し、自らの代弁者であるという感覚を得ている。(土井,2008:188)。また、ヴィジュアル系バンドの恋愛系の曲は、前述したような今日人気を集める歌詞と違い、難しい表現が多く、想像することが困難なものが多いように思われる。恋愛系ソングのように同じような歌詞が混在している今日では、このような大衆受けされにくい歌詞に希少性や魅力を感じる若者も多いのではないだろうか。そして、こうしたヴィジュアル系バンドを好む若者の特徴としてあげられるのは「コスプレ」である。ヴィジュアル系バンドのファンである若者は、バンドのメンバーの格好を真似るコスプレを好む。

こうしたコスプレをしてヴィジュアル系バンドのメンバーそのものへの同一化を望んでいるのであろう。またヴィジュアル系バンドを好む若者、とりわけ女性は「ゴスロリ」がファッションの主流となっている。ゴスロリを好む若者は基本的に黒い服を好み、肌全体を白く、目の周りを黒く塗り、まるで死人のような風貌を好む。また、十字架や骸骨、血を装飾として用いることで、死のイメージを積極的に演出している。(土井,2008:187)。一般に死は、私たちの意思ではどうにもならない事柄であり、誰にとっても避けられないものである。だからこそ、死について考えることは人間にとって必然ではあるが、楽しく生きている状況だと死について考えることを避けがちになるのは当然であろう。しかし今日においては、その色彩がゴスロリファッションにおける過剰な死の表現のように、死が強調されるようになっており、しかもそれが人々をひきつけるあこがれの対象とすらなっているのである。その理由として考えられるのが若者における生きることへの気持ちの欠落であるように思われる。最近あまり見かけなくなってきたが、数年前に若者を中心に「ネット集団自殺」が多く見られることがあった。これはネットで募った赤の他人と一緒に自殺するというものであり、前例になかったことから社会問題として扱われた。普通、死というのは自分の家族や知り合いなどに見守られながら迎えるという考えが普通ではないだろうか。しかし、ネット集団自殺のように全く知らない他人と最期を迎えるということ自体が若者における生きることの価値や尊さの欠落、そして身近な人々との連帯感の薄さを印象付けているように思われる。また、今日における日本は昔と比べればかなり豊かな時代になった。欲しいものは容易に手に入れることができるし、アルバイトをしながら生きていくことだって可能な世の中である。こうした別に頑張らなくて生きていけるといいう、生への気持ちの欠落こそがゴスロリファッションに見られる死へのあこがれを増幅させているのではないだろうか。

図 3-1 ゴスロリのファッション



出典 Wikipedia

4-2 ヴィジュアル系バンドの歌詞の特徴

ヴィジュアル系バンドの歌詞を分析し、よく見受けられるのは社会への失望感や無力感といった社会への反発的な歌詞である。the GazettE は、「さらば」という曲で「平和が何

時も人を甘やかすから 現代の日本は狂ってしまった 政治や警察や学校や家庭は 今じゃお互い傷つけあってる ふざけるな、やめてくれ このまま腐って逝くのか日本よ」と唄う。またナイトメアは「Morpho」という曲で「明日の明日もその明日も 同じ日々の繰

り返しだなんて つまらないだろう 生きる意味が見えない」と唄う。このような歌詞にヴィジュアル系バンドを好む若者は少なからずの共感しているのであろう。いや、ヴィジュアル系バンドをあまり聴かない者にとっても共感する歌詞かもしれない。このような歌詞における共感とは現代の日本の社会情勢が影響しているものと考えられる。次節ではこうした歌詞が共感される理由を考察していくこととする。

4-2-1 ヴィジュアル系バンドの歌詞における若者の共感

ヴィジュアル系バンドの歌詞が社会への反発を帯びたものが見受けられるというのは前述した通りである。こうした歌詞に共感する若者の心理は一体どんなものなのだろうか。考えられるのは、今日における日本の社会情勢である。現在、日本では若者が人間関係においても、社会情勢においても生きづらい時代を生き抜いている。就職氷河期で就職できない若者が多いからこそ常にこうした社会について大人たちが議論を交わしながらも一向に希望の光を望むことができない社会。また若者はこれからの社会を担っていくものだと大人に言われプレッシャーをかけられるものの、こうした大人たちに「最近の若者はだめだ」「ゆとり世代はだめだ」と罵倒され、若者の行き場がなくなっていくという現状が存在しているのである。だからこそ若者は大人からいじめられている存在とも言えるのではないだろうか。このような時代を生きる若者の代弁者といえる存在がヴィジュアル系バンドなのである。恋愛系ソングやアニソンの歌詞にも前述した歌詞のような社会への反発は見受けられない。しかしヴィジュアル系バンドはこうした時代に社会への反発を唄うことで若者の支持を得る。若者が社会への反発に共感する理由として推測されるのが前章で触れた、日本の格差社会であると考えられる。自分の掲げるあらゆる目標が常に相対化されてしまい、それらが持っていた魅力が半減してしまうのである。格差社会では勝ち組、負け組と社会は分別され、自分らしくありのままに生活しにくい時代となった。勝ち組はもてはやされ、負け組は劣等感を強く抱く。多額のお金や名声を手に入れた勝ち組と称されるものは異性も寄り付き、恋愛や結婚もスムーズに進み順風満帆な生活を送るというイメージが昨今のマスメディアの影響で根強く浸透してしまっている。しかしその一方で負け組と称されるものは勝ち組のようにもてはやされることはない。こうした格差社会の広がりこそが若者に無力感を抱かせ、ニートやひきこもりを生むことになってしまったのではないだろうか。このような時代だからこそ、前述した歌詞に見られる社会への反発を唄うヴィジュアル系バンドが支持されるのだらうと思われる。

4-3 格差社会が生んだ悲劇

今日の日本における格差社会が原因で、犯罪に結びついてしまったケースがある。それは2008年6月8日に起きた秋葉原無差別殺傷事件である。犯人は歩行者天国で人がごった返していた日曜日の昼にトラックで突っ込み、人を次々とはねた後に14人もの人を無差別に殺傷した。この事件の犯人が派遣社員であったことから、若者の雇用環境が厳しくなっ

ていることが将来に希望を失い、事件の動機となった見方も出た。派遣社員ということもあり、いつ派遣切りにあうかわからない。しかし、勝ち組と称される者はそんな恐怖を感じることもなく順風満帆な毎日を送る。犯人はこうした勝ち組だけがもてはやされる日本の格差社会に嫌気がさしたのではないだろうか。事実、犯人は6月4日にネット上で「勝ち組はみんな死んでしまえ」と書き込んでいる。この事件をもって若者の雇用環境悪化を問題視する意見が多く出された。こうした事件の背景もあり、一部で犯人を英雄視する見方がインターネット上で発生し、犯人に対し、「格差社会の神」、「勝ち組に対して事件を起こすことで一矢報いた」などと語られたのである。格差社会のもとで生きていくことが当然であるという認識にある若者は、常に学歴においても、仕事においても他者と比較されながら生きざるを得ない。ある集団の中では価値があると認められても、その評価はその集団内だけで通じるものでしかなく、別の集団に移ったとたんに否定されるか意味のないものになってしまう。こうした社会情勢において若者は自分がどう生きていけばよいのかわからず、社会への反発心を強く抱くようになり、このような悲惨な事件が起きてしまったのではないだろうか。またこの犯人に対して一部で英雄視された背景にあるのは格差社会に悩む若者がこの事件の犯人同様、数多く存在するからではないかと考える。この事件の後もインターネット上の複数のサイトにおいて殺人などの犯罪予告が相次ぎ、7月7日までに33人を検挙した。このほとんどが10代や20代であり、このような若者が感じる格差社会への反発が犯罪予告に影響しているものと思われる。

4-4 将来を悲観する若者

総務省が公表している平成21年の小選挙区における衆議院議員選挙の20~24歳の投票率は46.66%となっている。この数字は選挙権をもつ年齢層の投票率において最低となっているのである。最も投票率の高い年代であった65~69歳の投票率が85.04%であるから若者における投票率の低さは明らかである。また、平成19年の参議院議員選挙の20~24歳の投票率はそれよりも低く32.82%となっている。こうした若者の政治離れは選挙の後、お決まりのように議論が交わされるが、このような投票率の低さは若者の政治的無関心、とりわけ誰がやっても日本は変わらないという悲観的な見方があるからであると思われる。2012年1月8日の日経ウーマンオンラインに掲載された「新成人に聞いた日本の未来」についての問いでは「明るいと思う」と答えた成人はわずか20.2%で「暗いと思う」が79.8%を占めているのである。「暗いと思う」との回答者からは「政治家が期待できない」「経済が停滞している」といった理由が挙げられ、今日の若者はこうした理由があるからこそより一層の政治離れが進んでいるのではないだろうか。前述したように、日本では格差社会が大きくとり立たされるようになっている。こうした必然的に相対化されてしまう世の中を改革してほしいのに何も変わらずただ毎日が過ぎていく平凡な日々こそが、将来を悲観してしまう要因であるように思われる。2001年4月に発足した小泉政権の内閣支持率は歴代最高となる85%を獲得し、話題となった。このように多数の国民から支持される理由とし

てあげられたのが、「政治の在り方が変わりそうだから」というものだった。小泉内閣の人氣は選挙権を持たない子どもや、若者にまで浸透した。こうした小泉内閣の若者における人氣は、日々の閉塞感を打破し、変革してくれるかもしれないという期待の表れであると考えられる。このような事例からも明らかなように、若者は世の中の変革を望んでいるのである。若者の将来に対する不安をくみ取った政策を実行できるような世の中に変わっていくことで、若者の政治離れに歯止めがかかるのはもちろん、将来を悲観視する若者も必然的に減少していくのではないだろうか。

4-5 まとめ

ヴィジュアル系バンドの歌詞における特徴は他のジャンルの楽曲には見られないような暗い言葉が並べられていたり、社会への反発を表現しているものが多いということである。こうした歌詞が描かれ、共感される背景にあるのは若者における生きることへの希望の欠落やそこから派生する現代社会を悲観視していることである。第 1 章でも述べたように、若者は人間関係において生きづらさを実感しながら生活している。そんな中でも、経済の低迷や格差社会の出現など、人間関係の生きづらさと共に、先行きの見えない社会を悲観視しながら生活するという二重苦を抱えながら日々を生き抜いているのである。このようなどこにも逃げ場のない現状だからこそ、それに耐えきれなくなる若者はひきこもりという選択肢を選ばざるを得なくなってしまう。社会的な視点でひきこもりを考察すれば、やはり社会では通用しないなどといった批判的な見方が大半を占めると思われる。しかし、今日における若者の立場をじっくり考えると、ひきこもりに陥ってしまう若者の心理は誰しもが納得できるものであろう。また、若者が抱える二重苦から反社会的な犯罪が起きているというのも前述した通りである。秋葉原無差別殺傷事件を取り上げ、論じたが、犯人は格差社会や、心のよりどころにしていた携帯サイトにおいて孤立感を感じるようになったことから犯行に及んだとされている。このような若者が抱える苦しさが要因で悲しい事件に結びついてしまうのは非常に心苦しいものがある。若者が社会に悲観視することなく、社会に希望が持てるようになる世の中をつくることこそがこれから重要になるのではないだろうか。また、格差社会という必然的に相対化されてしまう世の中を壊し、皆が皆、ありのままに、自分らしく生き抜いていくということのほうが、どんな名声を手に入れるよりも価値があるという認識を植え付けることが必要であるように思われる。

おわりに

本論文で、若者における人間関係をサブカルチャーをはじめとして様々な側面から考察した。書き上げた今、感じるのは人間関係における生きづらさからは逃れることはできないが、軽減することはできるのではないかということである。情報化が進む中で、10年後、20年後の未来は今よりもはるかに高度なコミュニケーションツールが確立されていくことは間違いない。ただでさえ、現在のケータイやソーシャルメディアにおける人間関係がややこしい、うっとうしいと感じるのだから、この先新たなコミュニケーションツールが生まれても、今のような、もしくは今よりも進化した生きづらさが存在するだろうと容易に予見することができる。こうした未来の予想をした限りでは、やはり生きづらさを伴う人間関係からは到底逃れることはできないのかもしれないと悲観してしまうかもしれない。が、実はそうではないのではないか。様々な人間と多く関わることによって、人間関係のキツさを軽減できるはずである。第1章で、若者は自分のグループの人間関係の維持を最優先するから、外部の人間とは関わらない、関わる気力が残っていないというということを論じた。これこそが、人間関係の生きづらさを自分自身で増幅させてしまっているように思うのである。今の人間関係の維持を最優先する、だから外部と関わる気力が残っていないというのは、そのグループと自分の相性が悪いことの表れであるように感じるのである。相性のあうグループであれば、そもそも人間関係を維持する必要なんてないからである。だからこそ相性のあうグループというより、相性のあう人間を見つけることが生きづらさ軽減の必須要件ではないだろうか。今所属する人間関係の維持を最優先するから外部と関わる気力が残っていないというのは、私自身も経験したことがあるのでよくわかる。しかし、そうした過去を振り返ってみて思うのは、過酷な状況の中で気力を振り絞って外部と何らかの接触を持てば、視野が広がり、今のグループに固執することなく人間関係が豊かになったかもしれないということである。言ってみれば、抱えていた人間関係の生きづらさを軽減できたかもしれないということなのである。昔も、今も、そしてこの先の未来も人間関係における悩み、生きづらさを感じることは、当たり前のように存在する。しかし、その状況を救ってくれるのは、外部の様々な人間と関わること、すなわち人間なのである。人間関係において悩む時や苦しむ時は、ただ狭い範囲で人間関係をとらえるのではなく、もっと広い視野で自分の人間関係を相対化することが必要であるように思う。

また、サブカルチャーを通して人間関係を考察してみて感じたことは、様々な分野に手を出し、理解することの大切さである。私自身、ヴィジュアル系バンドというのは見た目の異様さから興味を示すことはなかった。しかし今回ヴィジュアル系バンドの特徴を考察したことでヴィジュアル系バンドを好む若者の心理、ゴスロリの意味、そしてそこから派生して現代社会の問題点についても考えることができた。自分の好きな分野以外について興味を示さないのは、人間当然のことのようにも思えるが、何事にも興味深く考察することで見えてくるものがある。だからこそ、広い視野を持ち生活していくことが人間同士の相互理解につながるのではないだろうか。

人間関係を豊かにするには、様々な人々と関わりを持つこと、そして様々な分野に興味を持つことが大切である。そこで構築できた人間関係こそが、今よりもっと最良な人間関係になるのかもしれない。

謝辞

本論文を作成するにあたり、ご協力してくださった方に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。また、本論文では私自身による見解が含まれており、私自身の解釈の違いにより本来の意味とは異なるような表現をしている箇所があるかと思いますが、ご了承ください。

そして卒業論文の作成の当初から、ご指導いただいた角一典先生には心から感謝申し上げます。いつも的確な指導をしていただいたおかげで、本論文を完成させることができました。本当にありがとうございました。

参考文献

- ・土井隆義,2008, 『友だち地獄―「空気を読む」世代のサバイバル』筑摩書房
- ・大平健,2000, 『純愛時代』岩波書店
- ・大平健,1995, 『やさしさの精神病理』岩波書店
- ・宮台真司/石原英樹/大塚明子,1993, 『サブカルチャー神話解体』パルコ出版
- ・成実弘至,2009, 『コスプレする社会―サブカルチャーの身体文化―』せりか書房
- ・宮台真司,1995, 『終わりなき日常を生きる』筑摩書房
- ・宮島喬,2000, 『講座社会学 7 文化』東京大学出版会
- ・尾木直樹,2009, 『ケータイ時代を生きるきみへ』岩波書店
- ・香山リカ,2002, 『若者の法則』岩波書店

参照 HP

- ・総務省 HP <http://www.soumu.go.jp/>
- ・国立社会保障・人口問題研究所 HP <http://www.ipss.go.jp/>
- ・ベネッセ教育研究開発センターHP <http://benesse.jp/berd/index.shtml>
- ・日経ウーマンオンライン HP <http://wol.nikkeibp.co.jp/>
- ・レコチョク HP <http://recochoku.jp/>
- ・文部科学省 HP <http://www.mext.go.jp/>